第１部　政治家になるまで＝私の政治の原点

「赤いランドセル事件」

私の記憶は０歳から始まります。

母が私のおむつを取り替えてくれているのを覚えています。皆そんなはずはないと笑いますが、なぜか割とはっきりとそのことを記憶しているのです。

７歳の頃、母は父と別れ、そこから母と私、それに一つ年下の妹の３人暮らしが始まりましたが、女手一つの生活は決して楽ではなかったと思います。

私が政治家になるに至った原点は、「赤いランドセル事件」にあるのかもしれません。家の近くの小学校に通うことになり、私は母に連れられ、デパートにランドセルを買いに行きました。そこにはツヤのあるピカピカの真っ赤なランドセルがずらりと並んでいたのですが、その列の端っこには地味な色のツヤのないランドセルがありました。「処分品大特価」と赤く書かれ、いちばん安い物でした。それが母の目に留まったようです。私はそれだけは選んでほしくないと心で思っていましたが、母が手にした物は、私の願いに反して、やはりそれでした。

それでも、家で改めて箱から取り出し、私が背負ってみると、妹が憧れの眼差しで私を見上げ、「すごいね。カッコイイね」と言ってくれました。

クラスで一番地味かもしれないそのランドセルを背負い、小学校の初日が始まりました。午後になり、クラス毎の集合記念写真撮影のため、正面玄関の前に集まりました。昭和４０年代ですから、他の母親たちは皆、当時の正装である、家紋入りの黒い着物姿でカメラの前に整列していましたが、私の母は、カメラのシャッターが押される直前になって駆け込んで来ました。服は着物ではなくシンプルなスーツ。仕事が忙しく、着物を着る時間が取れなかったのでしょう。１人だけ他の親と違う服で現れた母を見て、急に暗い気分になりました。

入学式から２週間ほど経ったある日、帰宅しようとすると、住宅街の曲がり角で突然クラスの４～５人の男子が私を囲み、地味な赤いランドセルのこと、母子家庭であること、私の肌の色のことなどを口々に嘲りました。私は、小学校の頃色黒だったので、マントヒヒと呼んでいじめるのです。それは一生忘れられないほど、辛い思いをした日でした。

その後も私が反抗しないでいると、いじめはどんどんエスカレートして、次の日は電柱に私を押しつけ、数人で私の身体を蹴ったり、コンパスでランドセルに穴を開けたりし、私は心もズタズタにされ、さらに１ヵ月後には、待ち伏せしていた男の子２人に大ケガを

「国民総政治家~税金の使い道はあなたが決める。」Copyright (C) 2013 HIROE MAKIYAMA　All Rights Reserved.

負わされて病院に駆け込みました。

そんな毎日がしばらく続きましたが、もう限界と思った母は、私と妹を群馬県高崎市に住む祖父母の家に連れて行きました。高崎の学校に転校したのです。

これが私の「赤いランドセル事件」です。自分が経験したいじめは壮絶でした。いじめが社会問題として取り沙汰されるずっと以前のことでしたが、いじめは昔からあったのです。私は政治家として、また、痛みを体験した一人の人間として、解決策が見つかるまでいじめ問題に関わっていきたいと思っています。

学生時代

母はまた働きに東京に帰ってしまいました。慣れない祖父母との暮らしが1年くらい続き、今度は父が暮らす東南アジアに行くことになりました。

父と暮らしていた当時、東南アジアはまだまだ貧しい国が多く、私くらいの子どもたちが大勢食べるために働いていました。

タクシーで市場に入った時のことです。「恵んでくれ。恵んでくれ」と、目の前にやせ細った汚れた手がいくつも伸びてきました。手足のない人も多くいて、中にはスケートボードのような板の上に足のない胴体を乗せ、片腕で移動している人もいました。これがこの世のものかと、大きな衝撃を受けました。その国（当時）は、盗みをすると足を一本、また盗みをすると腕を一本と、容赦なく切断するという残酷な掟があるというのです。

この時、子どもながら、私は世界中の国の人が安心して幸せに暮らせる世の中をつくることに参加できたら……と思いました。

日本に帰ってからは、再び母と妹との生活が始まり、インターナショナルスクールに。中学、高校に通う間、両親のこと、学校のこと、友人のこと等々、毎日悩みがいっぱいで、過食症や引きこもりも経験しました。

そんな日々を送っていたあるとき、アメリカに住む友人から手紙が届きました。メラニーといって、フィリピン系のアメリカ人です。フィリピンで一人暮らしをしている祖母の家で一緒に夏を過ごしてくれないかという誘いの手紙でした。しかも、私の家庭環境を知って、彼女のご両親が、私の飛行機代まで出してくれるというのです。

彼女は引きこもっていた私を、物理的にも精神的にも小さなカラから引っ張り出してくれた恩人となりました。

二人で過ごしたフィリピンのレイテ島での2ヵ月は、私にとってとても良い経験でした。レイテ島は電気も水もなく、雨の水を貯めて使うという生活で、主食はバナナ。ものには

「国民総政治家~税金の使い道はあなたが決める。」Copyright (C) 2013 HIROE MAKIYAMA　All Rights Reserved.

恵まれない島民たちでしたが、毎日元気で、本当にたくさんの笑顔を見せてくれました。

夏が終わり、長い暗いトンネルから明るい陽ざしが見えてきたのは、１６歳の秋でした。インターナショナルスクールに通いつつ、アルバイトにあけくれる中、多勢の人との出会いからいろいろなことに気付き、人のために何か役に立ちたいという、余裕すら出てきたのです。レイテや東南アジアの経験で、視野が広がり、自分の状況を客観視できるようになってきたのでしょう。そして、国連と協議資格のあるＮＧＯ、アムネスティ・インターナショナルのお手伝いをするようになりました。そこでは世界各地で行われる残酷な行為に対し、その国のリーダーに手紙をたくさん書くという活動に取り組み、また、盲学校に英語を教えに行ったりと、学生でも世の中の人のためにできることがたくさんあるということを痛感しました。

そして、国際基督教大学（ＩＣＵ）に入学。大学時代は、昼はめいっぱい授業に専念し、夕方からは、英語学校で教師をしたり、翻訳や通訳をしたりと、毎日アルバイトに励みました。

ＮＨＫ「英語講座Ⅱ」という番組のスキットにレギュラーで出演するようになってからは、他にも文化放送の「百万人の英語」（ＤＪの小林克也さんのパートナーとして）、ＴＢＳラジオの庄野真代さんの「トキメキエトランゼ」（レポーター）、ラジオたんぱの「日本全国ヤメロメどん！」（土曜日担当として生出演）にレギュラー出演。「ヤメロメ」は公開番組で、たくさんの学生や浪人生がスタジオに来て、全国の浪人生や若者から悩み相談のハガキをもらい、それに答えるというものでした。ラジオ界で有名な大橋照子さん、小森まなみさん、タレントの鳥越まりさん、それぞれが別の曜日を担当していました（フォークグループの「あのねのね」も、この番組でデビューしたそうです）。

ＴＢＳを経て米国弁護士資格取得

大学卒業後、憧れのＴＢＳに入社。テレビ本部社会情報局朝ワイド制作部というところに配属され、森本毅郎さん、山本文郎さんたちが出演する「モーニングＥｙｅ」という番組で、アシスタントディレクターとして働きました。

毎日徹夜という日が続きました。「お金バンザイ」という番組を担当していた時、レギュラーの野末陳平先生の秘書だった海江田万里さんに時々お会いする機会があり、投資や経済をテーマに打ち合わせをする時間はとても面白く大変勉強になりました。当時はまさか

「国民総政治家~税金の使い道はあなたが決める。」Copyright (C) 2013 HIROE MAKIYAMA　All Rights Reserved.

海江田さんが民主党党首に、私が同じ党の参議院議員になるとは想像もしませんでした。
そんな矢先のある日、日本で始めて米国弁護士資格を取得し働く女性が新聞の一面を飾りました。ミルバンク・ツイード・ハドリー＆マックロイ法律事務所の弁護士でした。どうしてもお会いしたくなり、もうその日に相手を探しあて訪問。話をお伺いして感銘を受け、この時、エンタティンメント業界で働き続けるにしても、資格を取って専門性を持ちたいと、強く思ったのです。
そうだ私も国際弁護士になろう！
米軍基地の中でロースクールの受験ができることを知り、ＴＢＳに勤務しながら試験を受け、何とか合格。実際に資格を取るため、アメリカに勉強に行く決心をしました。ＴＢＳや大学時代のアルバイトで貯めた限られたお金で留学するので、通常３年かかるところ２年でも卒業できる学校を探さなければなりませんでした。全米でそういう学校は２校しか見つからず、そのうちの一つが私の選んだトーマス・クーリー法科大学院でした。
できれば、ＴＢＳを辞めない形で留学したかったのですが、ＴＢＳにはロースクールへの留学制度はないということで、泣く泣く退職し、渡米。
「右を見てください。左を見てください。あなた方が座っている席の横にいる人とはおそらく一緒に卒業式は迎えられないでしょう。この学校は、卒業がとても大変だということを前もってお知らせしますので、皆さん覚悟をしてください」
入学式の冒頭で、校長先生がこんな挨拶をしました。
事実、校長先生が言っていた通り。カリキュラムは３学期制で、毎学期期末試験があるのですが、期末試験では大体３分の１の学生が落第し、退学になる、というまさしく生き残りゲームのようでした。
初めて宿題の分厚い判例集を開け、１ページ目を読み始めた時です。主語がどこなのか、述語がどこなのかわからなくなるほど各文章は長く、またラテン語が入り混じっていました。英語で育ったので、これまではどんな本でも問題なく読めたのに、法学部を出ていなかったせいか、１ページ目から読解に苦しむありさま。一つ一つの言葉はわかっても、文章として繋げると理解ができない……。涙がぽたぽたとこぼれ落ち、新しく買った本がびしょびしょになるほどでした。
机の正面の壁を見上げると、送別会を開いてくれた高校時代の友人たちの写真やＴＢＳで仲良くしていた仲間、先輩たちの写真が目に入りました。
今更後戻りはできないことはわかりきっていました。
同じような辛い夜が、数週間続きました。
それから少しずつですが、自分のレベルを遥かに超えていたはずの授業や宿題のハード

「国民総政治家~税金の使い道はあなたが決める。」Copyright (C) 2013 HIROE MAKIYAMA　All Rights Reserved.

ルが下がってくるのを実感できるようになり、ついに初めての期末テスト。結果は数日後に知らされました。私は残ることができましたが、入学式で言われていた通り、本当に私の同級生の多くが試験で振り落とされ、故郷に帰って行ったのです。

この生活が2年4ヵ月続き、何とか卒業にこぎつけました。こうしてミシガンのロースクールを終え、ニューヨークへ。

次のステップとして司法試験が待っていました。日本関係の法務を扱う事務所では老舗と言われるニューヨークのマークス村瀬法律事務所に在籍しながら、司法試験の勉強に臨みました。

アメリカの司法試験と日本の司法試験との大きな違いは、まず、日本では同じ資格が全国で通用するのですが、アメリカの場合は、州別の試験となっているところです。試験自体は、全米共通の試験と州法との二部構成になっています。大都市ほど国際ビジネスが盛んで日本関係の仕事もあることから、私は、アメリカの各州の中でも難しいと言われるニューヨーク州の試験を受けることを選択。司法試験は2日間で、次の日に別の州法の試験を受けることもできます。私はお隣のコネチカット州だったら、ニューヨーク州での試験から次の日の試験への移動も可能なので、コネチカット州も受験することにしました。

しかし、なかなか司法試験に合格できませんでした。昼は仕事に追われ、夜は山積している問題集を前に、気が遠くなるほどの勉強を毎晩繰り返し、そして4度目の試験の日。前夜になって、急に高熱に見舞われ、試験当日も熱が続く中、何とか3日間の試験を無事に終わらせることができ、やっとではありますが高得点で合格に漕ぎ着けることができました。

松竹時代

ハードな仕事と勉強との両立が続き、いろいろな出会いがあった2年半のニューヨークの生活でしたが、とうとう別れを告げる日になりました。日本の映画製作や公開、そして歌舞伎座を営む松竹株式会社から仕事のお誘いのお話がありました。当時２７歳だった私にとっては大変光栄で夢のようなお誘いでした。さらに驚いたことには、松竹の紹介で、日本に帰国する前に、まずメジャーな映画会社でインターンとしての経験を積んでから戻って来いとのことでした。

荷物をまとめ、飛行機に乗り込み、次に向かったのがハリウッド。

「Ｈｏｌｌｙｗｏｏｄ　ｈｅｒｅ　Ｉ　ｃｏｍｅ！」　あのハリウッドサインを眼下に望みながら、飛行機の中から、母にその時の心境の一言をポストカードに書きました。

「国民総政治家~税金の使い道はあなたが決める。」Copyright (C) 2013 HIROE MAKIYAMA　All Rights Reserved.

ハリウッドといってもメジャーな映画会社はいくつもあります。コロンビア映画、パラマウント映画、ユニバーサル映画、ワーナー・ブラザースにディズニー。その中で、バッグス・バニー やトゥイーティーのキャラクターで有名なワーナー・ブラザースでインターンとしてお世話になりました。

松竹ではほかにもいろいろな仕事に携わりました。たとえば、ユニバーサル映画との合作映画に関する契約書をまとめるという仕事。テロップのサイズからＢＧＭから何から何まで詳細に交渉し、まとめていかなくてはならず、そのあまりの細かさに驚かされました。脚本を用意する段階から撮影、上映、ビデオ化、テレビ放映まで一連のスケジュールをつくるのですが、それ自体も細かく毎日毎日アメリカ側と交渉しなければならないという具合でした。

また、松竹では国際映画祭の仕事も体験。東京国際映画祭では、ドイツの名監督、ヴィム・ベンダース氏の付き添い通訳をしたり、文化村劇場で原節子さんと外国人俳優や監督との通訳を務めたり、英語での司会を務めたりするなど、数多くの貴重な経験をしました。

ハワイ国際映画祭では、女優の三田佳子さんと当時の奥山融社長、そして全国の映画館主の皆さんと一緒にハワイに行くという国際映画祭ツアーを企画し、私がツアーコン係と三田佳子さんの付き添い通訳係を務めました。その他京都国際映画祭など、多数のイベントに携わり、松竹時代は、国や文化の違いなどを知る上で得がたい様々な体験ができ、今の自分に大いにプラスになっていると思っています。

ちなみに、この松竹時代には、山田洋次さん、奥山和由さんのいずれも映画監督のお二人にもお世話になりました。

チャリティの集い「葡萄会」の活動

このように社会に出てから多忙な毎日を送っていたのですが、働く傍ら脳裏から離れることがなかったものがあります。子どもの頃見たあの極貧の人々の姿です。そして、自分なりに何か社会に役立ちたいという思いをずっと持ち続けていました。

そうはいっても私は２０代。仕事もプライベートも忙しさ真っ盛りでしたので、ハードルを高くしムリをしても、長続きしないと思いました。そこで、「葡萄会」という名のチャリティの会を親しい友人と結成することにしました。１９９３年秋のことです。会の目的は、私が子どもの頃から見聞きしてきた、貧困の中で明日にも命を落としてしまうかもしれない世界の人々のために、具体的な支援をしていこうというものでした。

会長は私、発起人は以下の皆さんにお願いいたしました。当時は皆若く、志を持って会

「国民総政治家~税金の使い道はあなたが決める。」Copyright (C) 2013 HIROE MAKIYAMA　All Rights Reserved.

に集ってくださった方々です。安藤高朗（現全日本病院協会副会長）、程近智（現アクセンチュア株式会社社長）、棚井みゆき（ビューティースペシャリスト）、大塚聡子（医師）、郷成龍(現株式会社ロイ・オーガナイゼーション社長)、佐藤由貴(ダイヤモンドホテル役員)、妹の夫・藤井ダニエル（ブラックストーン・グループ・ジャパン株式会社マネージング・ディレクター）、妹・藤井由喜（ＪＡＬ客室乗務員）。その他、裁判官、学生、ヴァイオリニスト、ピアニスト、主婦、会社員、弁護士、教員、会社経営者など、多彩な方々が会員として参加していました。「葡萄会」の名には、葡萄のように結束が固く、実り多き会にしていこうという気持ちが込められています。

まず役員会を開き、収益金の送付先をしっかり決め、会の規則なども決定した上で、それまで勉強会や会合で知り合った多くの方々に通知し、第１回目の会を東京の表参道にある友人のインド料理店で開催しました。

以後、会では、音大生にボランティアで演奏してもらったり、親友で会の発起人でもある棚井さんにヘアメイクの講座を開いてもらったりして、その会費の一部をチャリティにしていきました。会費はその時によって違いますが、会場にするお店と交渉し、趣旨を理解してもらい、たとえば、前の人が使ったテーブルクロスは取り替えなくても、こちらで掃除をするからとお願いし、お店には本来８０００円のところ４７００円にしてもらって、会費は５０００円にし、その内３００円をチャリティにく配分するようにして、出席していただく人たちにも負担のないように努力しました。

会には、「国境なき医師団」や「国境なき子どもたち」など、世界の紛争地域、貧困地域で活動するＮＰＯの人や、障害を持つ人がワインをつくっている「ココ・ファーム・ワイナリー」の人など、毎回信頼のある団体を招き、活動状況の説明を受け、収益金を手渡し、次回に、私たちが提供した収益金を具体的にどのように役立ててくれたのかということを報告してもらいました。

そのほか、会では、葡萄会の「葡萄」にちなんで、世界各地のワインを紹介し、そのワイン産地の文化に、音楽やワンポイント外国語講座等を通じて触れるという趣向も入れました。

この「葡萄会」には様々な方々が出席していました。後に民主党代表となる海江田万里さんや阪口直人さん(現衆議院議員)、新浪剛史さん(現ローソン社長)、「国境なき医師団」の寺田朗子さんや守谷季美枝さんらが、よく参加してくれました。彼らをはじめ、この会に参加した大勢の方々が、現在社会の第一線で活躍中です。

「葡萄会」を続けて１０年以上が経ちました。２０代で始めた会でしたので、会に集まってきてくれた仲間も皆若い方々ばかりでした。そのため、自分たちとしては一所懸命や

「国民総政治家~税金の使い道はあなたが決める。」Copyright (C) 2013 HIROE MAKIYAMA　All Rights Reserved.

っていたのですが、限界があり、それほど多額の収益金が集まったというわけではありません。ある時は、数回の催しの収益金を合計して６０万円以上の寄付をすることができましたが、その時が多分最高額だったような気がします。

もっと大きな形で、貢献できないものか……会を重ねるたびに考えるのでした。

より大きな社会貢献を目指して

１９９５年、ポリグラム株式会社（要確認）（現ユニバーサルミュージック社）から法務室室長としてお誘いを受け、松竹を退職。今度は音楽会社の法務担当として仕事をすることになりました。

ポリグラムの傘下には、ドイツ・グラモフォン、キティレコード、マーキュリーなど、当時は歴史のあるたくさんの有名なレーベルがありました。今でも多くのファンを持つＳｐｉｔｚ（スピッツ）というグループがちょうど売り出されていた頃で、ＣＤがたくさん売れると、社員全員の机の上にご褒美が載っているという嬉しい制度もありました。

嬉しいと言えば、２９歳の時、弁護士の夫と結婚をしました。会社はそれと同時に退社。その後夫が米国弁護士資格を取るため、所属法律事務所の派遣でニューヨークのコロンビア大学ロースクールに入学することとなり、私も一緒に渡米し、夫が卒業するまでの間は、ニューヨークおよびサンフランシスコの弁護士事務所に勤務していました。

帰国後、二人の子供が生まれましたが、その頃、新聞に載っていた民主党の大きな広告が目にとまったのです。民主党が国会議員を広く募集している、という記事でした。紙面一杯に様々な職業を持っていた現国会議員のイラストが掲載されていました。元医師、元保育士、元銀行マン、元看護師、元教員――本当に「民」を代表する人々が民主党の国会議員になっているのだ、と思いました。それまでは、政治家というのは、親が政治家か、若い頃から政治家の秘書として働いてきた人がなるものだと思っていたのですが、民主党の議員が幅広い職業の出身であることを知り、もっと大きな社会貢献がしたいとかねがね考えていたことが、私にもできるかもしれないと思い、応募する決心をしたのです。

間もなくチャンスが巡って来ました。２００５年の神奈川県参議院補欠選挙の候補として、私が選ばれたのです。実は、私の他にもう一人、最終選考まで残られた方がいたのですが、面接当日姿を見せなかったのです。人生を左右する大きな局面が、このような形で決定されたのは、驚きというほかありません。予期せぬこととはいえ、大きな社会貢献をという志の実現に一歩近づいたという思い、自分がこれから進むべき道はこれなのだという思いを強くしました。

「国民総政治家~税金の使い道はあなたが決める。」Copyright (C) 2013 HIROE MAKIYAMA　All Rights Reserved.

候補者に決定した時は、選挙はもう目の前に迫っていました。ポスターのための写真撮り、当時の前原誠司民主党代表とのツーショット写真撮りや出馬に向けての記者会見。初めての街頭演説も新橋で経験しました。前原代表、小宮山洋子衆議院議員、蓮舫参議院議員と並んで街宣車の上に立った時は、足も震え、手も震え、ドキドキでした。

総選挙に負けた直後の国政補欠選挙だっただけに、これから盛り返すぞ！という思いで、

「政治、官僚、業界の癒着構造を崩すために、全力で頑張ります！」

と、こぶしをあげたのを思い出します。

いよいよ補欠選挙が始まりました。神奈川県の各地を総支部長や地方議員の皆様に引き回していただき、また各駅や街角に立って、街頭演説を繰り返しました。

私の他、自民党、共産党の候補者も女性で、女性三人の戦い、また、補欠選挙のため、全国で唯一の国政選挙ということもあり、メディアにたくさんとりあげていただきましたが、あっという間に17日間の戦いは終わりました。結果は、不徳の致すところ、惨敗でした。ですが、多くの仲間の支援のお蔭で７６５，５８９票を獲得することができました。

その後、２年弱の間、２歳と３歳の子連れで神奈川県各地を回り、街頭演説や、ポスター張りの依頼など、人が集まるあらゆる所に出かけていきました。落選中は川を渡って東京の実家に一度も帰ることはありませんでした。

２００７年、逆転の夏。５５年続いた政治、官僚、業界の癒着構造に終止符を打つべく、民主党は参議院第１党の議席を獲得。私も１０１０，８６６票という重い票をいただき、神奈川県選出の参議院議員としてトップ当選を果たすことができました。

オリーブ・グリーン

当選して間もなく、子どもの頃見て育った世界の極貧を思い浮かべ、政治を志した原点から取り組み始めました。外交防衛委員会、ＯＤＡ（政府開発援助）特別委員会に入り、世界各地で３秒に１人子どもたちが亡くなっていることを踏まえ、日本発祥の母子手帳の世界普及を提案しました。

財政金融委員会では、アメリカで見てきた公益団体への寄付制度（少額の寄付でも税控除を認める制度）を紹介。さらに、日本の経済活性化を考え、選択と集中により京浜港を発展させて、他国の港との国際ビジネス競争に打ち勝つための施策（国際戦略港湾）、羽田空港周辺地区の特区化による企業誘致、流通をより発達させるため羽田空港からの神奈川県側の出入口構築（神奈川口構想）などを訴えました。

その他、厚生労働委員会でＴＰＰ交渉における国民皆保険制度の堅持を訴えたり、また

「国民総政治家~税金の使い道はあなたが決める。」Copyright (C) 2013 HIROE MAKIYAMA　All Rights Reserved.

身近なところでは、家計に直結する課題として、政府がコントロールできる輸入小麦の値段を下げる必要性を訴えたりしました。その前振りの質問として、当時の麻生太郎総理大臣にカップラーメンの値段を尋ね、「４００円ですか？」という、消費者物価の実態を知らないことをあぶり出す答弁を引き出したとマスコミで話題になりました。質問後、実際に小麦の値段は２割下がり、カップ麺の中身は増えたと言われています。

このように、政治家になって６年間、選挙中にも着ていたオリーブ・グリーンの洋服を着て、私は、国会で、地元で、そして国際会議などで活動を続けています。このオリーブ・グリーンには、私の次の思いが込められています。

① オリーブは平和の象徴
　平和な世の中を子供たちに残したい
② 緑あふれる美しく、安全な環境を作りたい

第2部へ続く

また明日、お楽しみに！

「国民総政治家~税金の使い道はあなたが決める。」Copyright (C) 2013 HIROE MAKIYAMA　All Rights Reserved.